巻頭エッセイ

外国語の学習は別の人生を生きること

養老孟司　Yoro Takeshi

若い頃は，英語で論文を書いた。その後，すっかりイヤになって，書かなくなった。最近は虫の論文を書く必要があって，仕方がないからまた英語で書く。そういうときには，頭から英語で考えるから，頭のなかの世界が二重になっている。一つは英語の世界で，もう一つは日本語の世界である。両者は重なるようで，微妙に重ならない。一種の二重人格というしかない。

外国語を手段と思っている人がある。私は本質的にはそうではないと思う。外国語を読み書き話すということは，そのことばを生きることである。だから私は英語で書くのがイヤだった。私は日本で生きているので，英語圏で生きているわけではない。

論文を書かなくなった中年の時期でも，話すことは多かった。今でも英語のインタビューを受けることがときどきある。話す不自由はさして感じないが，聞くほうには苦労する。聞き慣れていないからである。英語といっても，ありとあらゆる方言がある。訛りもある。

小説にはそれがときどき出てくる。音にしたがって，スペルを変えてある。それを「正常に戻して」読むが，結局わからないこともある。

特にわからないのは，そうした訛りの社会的意味である。その登場人物の訛りが，その局面で何を意味しているのか，それが私にはまったく不明である。今読んでいるスティーヴン・キングの小説では，ある教授が南部訛りで話す。それがどうも胡散臭さを強調しているらしいのだが，本当のところはわからない。私はアメリカの東部人ではない。

日本国首相が関西弁や東北弁で話していると，奇妙に思われるに違いない。その「奇妙さ」がどういうものか，真に理解できるのは，日本社会で暮す人だけであろう。プーチンの話し方，サルコジの話し方で，ロシア人やフランス人は，さまざまなことを感じているはずである。その社会に暮さないと，それはわからない。ことばは字面だけではない。

本当に美しい日本語というものがある。それを今ではほとんど聞くことができない。そういう話を聞くことがある。これも同じであろう。日本語に対する感性がないと，そもそも美しいか，醜いか，それがわからない。まして外国語になろうものなら，どうにも仕方がない。わかるはずがない。

ことばを覚える年齢になると，われわれは絶対音感を失う。母親が高い声で話したことばと，父親が低い声で話したことばが，「同じ」言葉に聞こえないと，不自由だからであろう。それは音楽的には，ある種の感性を消すことである。

外国語の学習とは何か。それはつまり別の人生を生きることである。二重人格を持つことである。そう私は思うが，それにしては人々は安直に「外国語を学ぶ」。でも本当にバイリンガルになるなら，それは何かを「消す」に違いない。われわれは脳を一つしか持っていないからである。

ようろう　たけし
神奈川県出身。東京大学医学部卒。1996 年より北里大学教授，1998 年から東京大学名誉教授。医学博士。「脳」研究の第一人者。著書『バカの壁』がベストセラーに。『バカの壁』『死の壁』で理解しにくかったところもわかりやすい話ですべて氷解する。ほかにも『からだの見方』『唯脳論』など著書多数。ひとと動物のかかわり研究会代表。